『進み行くイエス』（ルカの福音書 9 章 46-62 節）2021.3.14.

＜はじめに＞ 先回までのマタイの福音書からルカへと変わりますが、物語はその続きです。51 節はイエスの活動の転向点です。ガリラヤ周辺から離れてエルサレムへと進まれます。ルカの福音書には、エルサレムへの旅に多くの独自の物語を描いています(9:51-19:44)

Ⅰ　イエスの姿勢(51-53)

①エルサレムに向けて(51-53)

天に上げられる日とは十字架と復活・昇天の一連の出来事を指しています。ガリラヤからエルサレムへはサマリヤを通過する道が最短で、先遣隊に宿などの備えを命じました。イエスの目指すところはエルサレムだと弟子たちにも表明され、前進されます。

②毅然と進む(51)

イエスの相貌が今までと違うのを、弟子は気づきました。エルサレム進出を国の再興と結び付けていたかもしれません。かつてイエスを救い主と信じたサマリヤ人(ヨハネ 4:42)が、今回は拒絶します。なぜなのでしょうか。ヨハネ 4:20-24 と合わせて考えてみましょう。

③ゴールを見据えて

今回のエルサレム上京は祭礼への巡礼だけではありません。イエスはそこでの受難と復活による神の救いの計画の完成に向けて毅然と進まれます。時・場所・出来事すべては神の定めです。主に従う者にもこの視点と姿勢が求められます。ゴールはどこですか。

Ⅱ　弟子の考え(54-56,46-50)

①焼き滅ぼそうか（54-56）

イエスを拒絶したサマリヤ人の態度に、ヤコブとヨハネ(マルコ 3:17)が進言します。滅ぼそう、の言葉がイエスを振り向かせ、二人は叱られます。異本には 19:10 に似た加筆もあります。「今は恵みの時、救いの日」(Ⅱコリント 6:2)、裁きと滅びは後に委ねて進むべきです。

②だれが一番偉いか(46-48)

弟子たちの関心事で、再三議論となります(22:24,マタイ20:25)。他に先んじ、上に立とうと虎視眈々と狙っていました。主は一人の子どもを例に、彼らの中で一番偉い者を説かれます。神とイエスにあって受け入れられる人を最も尊ぶのが、神の国であり教会です。

③だれが味方か(49-50)

ヨハネはその人が弟子一団に属さないから禁じたとイエスに報告します。以前(37-43) 彼らができなかったことへの嫉妬も垣間見られます。イエスの意は異なりました。狭量な仲間意識から、イエスの名による御業を止めてはなりません。(注:11:23 はイエスとの関係です)

Ⅲ　イエスに従う道(57-62、マタイ 8:19-22 参照)

①枕するところ(57-58)

一行がさらに進むと弟子志願者と会います。「どこへもついて行く」とは健気ですが、その道は安定・安住とは対極で、主の向かわれる先はエルサレムです。イエスがその生涯の最初と最後に身を横たえた場所もそのことを暗示しています。それでもついて来ますか。

②優先すること(59-60)

二人目は主から声を掛けられますが、まず父を葬ることを済まさせて欲しいと願います。親に対する義務の重要性を否定しているのではありません。イエスに従い、神の国を言い広め、生かす責務は死と葬りより優先されます。この価値観に基づき、ついて来ますか。

③表明と覚悟(61-62)

三人目はルカ独自です。この志願者は、主に受け入れられたなら家族に別れを告げるつもりでした。畑を耕す際、鋤を振る前に後方安全を確認します。イエスは慣用句を用いて、順序が逆であると諭されます。覚悟のない表明ではいつまでも前に進めません。

＜おわりに＞ イエスは心定まって、着々とエルサレムへ、十字架へと前進されます。私たちの罪の贖いの実現のためにです。そのイエスについて行きますか。ならば、自分の考え・価値観を手放し、時には叱られたとしてでも、なおもイエスに聞き従おうとしているでしょうか。(H.M.)